

日中交渉を大平外相に聞く

聞き手・四国新聞編集局長 阪根 義雄

日中国交正常化を果たして帰郷した際に観音寺市の大平事務所で行われたもの。日中交渉の舞台裏と新生中国に対する率直な見解が語られている。阪根氏は現在、四国新聞社顧問。

政治生命かけて潮流を転換

今回は日中国交正常化という大役を果たされ、本当にご苦労さまでした。われわれ県民としても外相の活躍を誇りに思っております。帰郷されたのを機会にいろいろおうかがいしたいのですが、きょうは日中国交正常化に伴う交渉を中心に、当時の偽らざる心境などについて率直なところを聞かせていただきたい。外相は総裁選に立候補されたさい「潮の流れを変えよう」と言明されましたが、今度の日中国交正常化というのがその第一の実績と思う。その大任を引き受けて北京へ出発する前の心境は。

大平 国内では（日中国交正常化を）そう急がないでいいんじゃないかという考えもあれば、絶対に反対だという方々もありました。もとよりそういう（反対の）方々は数の上では少ないが、非常にやかましいわけで、賛成の方々は黙っていた。毎日、私の耳にはいるのはそういう自重派と反対派の

意見だった。そのご意見が理解出来ないわけではないのだが、それに政府が従っていれば多くの賛成派の皆さんの欲求不満が、今度は表門から怒とう（溝）のように押し寄せてくるわけで、まあ、前門のトラ、後門のオカミ」という状況だった。そこで、ギリギリの決断をしなければならぬので、まあしんどいことでした。それが第一でした。第二は、事をなす場合、なそうとする場合、仕上げようという場合、それ（日中国交正常化）が大問題であるだけに、自分の身がどうなるか、ということをも人間だから考えないわけではなかった。自分の政治的な生命、自分の物理的な生命の危険ということを思いました。それは私だけでなくて、（田中）総理としてはより以上の決断がある。総理としてよく決断してくれたと思いい敬意を表しているんです。

しかしこの日中国交正常化という流れを変える最初の発言は、外相だったように記憶しているんですが…。

大平 ええ、それは私の長い問題ですからね。私の前の外務大臣の時にも非常に苦しんだ問題でして、古くして新しい問題なんです。そういうことをいつまでも同じ状態に置くのは、政治として非常によくない。けれどもこれには、やっぱり機が熟するのを見極めないといけません。それから当方と先方の考えを、一応見当つけなければいけません。そういったことが出来なかったから（国交正常化が）やれずにいたわけです。

その決断をされたのはいつごろでしょうか。

大平 田中内閣が出来たときにやるうということとは声明したんです。ただ、これは急いでやるとうことはいいましたけれど、いつやるかいつてないんです。いつやるかを、具体的にことしの秋と決めたのは内閣が出来てから一カ月余りあとでした。

感想は。

北京へ乗り込まれて交渉のさい、周恩来総理に会われたわけですが、その時の周総理の率直な

世界の大人 毛・周氏

大平 態度は大変、いんぎん（懇懃）丁重で、謙虚ですね。それから別にこだわりのないふん囲気
で非常に博覧強記です。世界の出来事を正確に記憶している。その軽重、緩急の判断をちゃんともっ
ている人で、非常にすぐれた人だと思えます。それから一つの自分の考えを通すものの、色眼鏡をも
つてものを見るのでなく、ごくリアルに見るように努めているんですね。お年より若くみえる人でし
た。私なんかとても足元に寄りつけませんよ。私は大変教えられましてね、現代の偉人の一人だと思
います。

毛沢東主席と会見された時の感想とか印象はいかがでしたか。

大平 毛沢東氏はね、そう『村夫子』という感じ。きわめてざつくばらんで、これまたこだわりの
ない人でしたよ。談論風発でね。ただ毛主席はリニューマチで足が不自由ということでした。それから
首のあたりを押さえながら話していましたが、軽い気管支炎という話を聞きました。あまり健康体じ
やないので遠からず神さまが迎えにくるといつてましたね。悠然とした大人物という感じです。困難
があるから生きがいもあるので喜びと悲しみ、成功とか失敗などにあまりこだわらない心境におられ
るように感じましたよ。

外相なんか非常に共感というか、共鳴を感じられたのではないのでしょうか。

大平 いや、私なんかまだまだ「青二才」だから（笑い）。北京の街を歩いていて見かけたのだが「為人民服務」と人民の為に服務するという言葉を、絵文字のような毛主席の筆跡で書いてあります。これからも感じたことだが、人民に対する信頼というか、愛情というか、そういうものから中国は人民社会主義の国じゃないかと思った。共産主義というのは世界中にないんで、永遠に達せられない道標ですからね。あるのは、いろんな民族が自分の形に合った社会主義的な実験をやっているケース。失敗もしたり、成功もしたりで、試行錯誤をくり返しているんで、中国もその一例に過ぎないんだけど、しかし中国のは権力の立場からこうしよう、ああしようというのじゃなくて、何か人民中心に人民の立場で人民の自発的な創意工夫、人民の意欲そういったものをどのように尊重して、具体化していくかを考え、物差しを人民に置いている。リンカーンがいった「人民の人民による人民のための政治」という言葉に（中国の）呼吸が合っていますね。

それは外相、ユニークな発想というか、お考えですね。これまでそんなお話を聞いたことはなかったのですが、確かにリンカーンのあの言葉と中国の現在の体制に共通するものがあるかも知れません。大平 共産主義体制の鉄のわく組みで押しつけているというようなものではないと思う。もっともつと、伸び伸びしたものがありません。私は通産大臣をやっていた時に、東欧を見ましたがね、あれは与えられた社会主義だな。強制された社会主義という感じで、人民が欲しないのに、そういうわく組みに入れられて身動き出来ない、ということに対する不満がにじみ出ているようでした。中国の場合はちよつと違いますね。人民が自発的に工夫して、お互いに批判し合い、議論し合いして、そこから人民本位な仕組みを作り上げようじゃないかという、自前のものというような感じですよ。もっとも、私も数日間の滞在で首脳と十数時間話したにすぎないので、それから判断するのは少し冒険だけだね。

まあ多少の本を読んで、実際に訪れてそんな感じがするんです。まだ勉強の途中だけど。

ところで外相、中国で詩をつくられたそうですが、ご披露願えませんか。

大平 私は万里の長城を見た時と、それから上海で中国の人と別れた時の二回詩をつくりまして、向こうの私の相棒である姫鵬飛外相にみせたんです。あまりいい詩じゃないですがね。こんなんですよ。万里の長城のは、

長城延々六千里

汲尽蒼生苦汗泉

始皇堅信城内泰

不知抵抗在民心

山容城壁默不語

栄枯盛衰凡如夢

(長城延々六千里、汲み尽す蒼生苦汗の泉、始皇堅信城内のやすきを、知らず抵抗民心にあるを)もう一つの上海で作ったのが、

友情美酒潤枯腹

中国天地新涼爽

得友遂事開國交

飛向東天心自平

(友情の美酒、枯腹を潤す、中国の天地新涼さわやかなり、友を得て事を遂げ國交を開く、東天に向けて飛ばんとす心おのずから平らかなり)

争いよりも和を ぶるさとは誇り

念願の日中国交正常化が達成され、これから外相は続いてオーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、ソ連と各国を歴訪されるのですが、大平外交をどう展開するのか、その基本的な考え方について。

大平 日中が和解したことについて、世界は戸惑っていると思っんです。だれもこの点についてわかっていないのじゃないかと思っ。とりわけアメリカもソ連も何となくすっきりしてないんじゃないでしょうか。われわれも実は、いったいどういう子供を生み落としたのか、どんな子供に育つのか、はつきり今のところ見当がつかない。ただ私は日中が背中合わせでいるよりは、仲のよい方がいいと思っんです。日中が話が出来ない状態より話が出来る状態の方がいい。そして話が出来る状態になりますと、お互いにこうやろうじゃないかと、いうことがいえるのじゃないでしょうか。さらにこういふことはしないようにしようじゃないかといえると思っんです。それは何のためかという点、アジアの平和という点、秩序という点、日中両国の幸せという点で、そうしたことのため精いっぱいやってみたい。このことはアメリカにとりましても、ソ連にとりましても、無害なことであり、米ソ両国にとってむしろ望ましいことじゃないか、と思っんです。そういう当たりまえのことを当たりまえに話したいと思っています。

最後にもう一つ。こういふたとえはおかしいかもしれませんが、私、外相が中国から帰国したさい、弘法大師が中国で修行をして日本へ帰り、国内の宗教の流れを変え、四国でため池をつくり、

八十八カ所などをつくられ、郷土にいろいる尽くされたことを連想しました。そこで大臣の郷土に対するお考え方、そして郷土香川はどうあって欲しいか、どうあるべきかといったことについて聞かせていただけたらと思います。

大平 帰国のさい北京で周恩来氏の専用機に乗りましてね、上海まで一緒に飛んだんですよ。そのとき周恩来氏といえども、自分の郷里の上海に近づくとつれて、そわそわしていましたよ。それで「あすこが私の郷里だ」と浙江省のあたりを指して話しましたが、そのさい彼の胸中には若き日の思い出が走馬灯のようにかけめぐっていたのじゃないでしょうか。彼も人なりと思いました。人の一生というのは郷里と離れたものじゃないですね。そしてそれは時がたつにつれて、ますます郷里の山川草木、顔また顔、昔の思い出、そついったものが鮮明になつてくるんです。ですから私はもし人類に郷里がなかったとしたら、世界はめっちゃめっちゃないだろうか、郷里の誇りとか郷里の榮譽など、郷里との連鎖において行動を規制されているのじゃないかと思う。そこにちゃんとした節度が生まれてくるんですよ。そういう意味で香川がまったく王道楽土になるなんて思いませんけどね、少なくとも争いよりは和の方が強いところであって欲しいと思うんです。憎しみよりは理解の系の方が強い、そういうところであって欲しい。しかしたくさんの人が郷里を出るわけですから郷里によい思い出をもっておられるような郷里であって欲しいと思います。弘法大師をふるさとの先人としてもつことをわれわれは誇りに思っているし、これはふるさとの人の共通の財産ですからね。そういう郷里を大切にしたいものだと思います。